Accounting SQUARE

職業における会計の魅力

PwC あらた有限責任監査法人
代表執行役
木村（きむら） 浩一郎（こういちろう）

会計というのは、物事の姿をわかりやすく説明するためのツールである。それは決して単独ですべての姿を説明しきれるものではないが、全体観をわかりやすく説明できるツールとしてとても有用だ。だからこそ、坂本龍馬が「これより天下のことを知るときは、会計もっとも大事なり」と記したり、『帳簿の世界史』という書籍がベストセラーになったりするのだろう。

ところが、最近は大学で会計を学ぶ学部・学科や会計専門職大学院の人気が低落していると聞く。公認会計士試験受験者数も、ようやく若干の上向き傾向は見られるものの引き続き低位安定の域を脱していない。しかも、会計の仕事は人工知能に取って代わられるだろうとの予測すら出されている。これでは、会計の職業にワクワク感を持てないのも当然だ。

筆者が「会計」に出会ったころ、簿記や原価計算で経営の姿を鮮やかに浮かび上がらせることができるのに興奮したことを覚えている。学部を選ぶ時には、より大きな視点で天下国家を語れるような気がして経済学を専攻したが、自分の一生を捧げる職業として会計により強い魅力を感じるまでさほど時間はかからなかった。

今でも公認会計士という職業選択を後悔していない。しかし、若者と会計の喜びを共有できないのは残念だ。なぜ現代の職業における会計のワクワク感が薄れてしまったのだろうか。

職業における会計とは

細則主義（ルールベース）の下、そのルールが実務の世界において職業会計人の能力を超えてしまい、ごく少数の人にしかわからないようでは、ワクワク感は減ってしまう。会計の現場がいわば機械的に数字を扱っているに過ぎなくなってしまう。

また、会計という仕事に数字と年中にらめっこしているかのような誤解があるのも事実だ。会計はより多くの人が共通の尺度をもって議論し価値創造できるようにするためのツールである。数字の積み上げが目的ではなく、より大きな価値を生み出すためのプラットフォームであることにその価値がある。

目標値があらかじめ決まっていて、これを目指して数字を組み上げるような仕事も、いわば数字のお遊びになってしまい、本質的な面白さを感じることはないだろう。会計によって実態が明らかになるのではなく、むしろ架空の世界が組みあげられるわけだが、でき上がったもの

から読み取れることは何もなく、何の説明にもならないというのはあまりにむなしい。

会計に見積りはつきものだ。見積りがむなしい作業とならないために何が必要なのだろうか。おそらく美しいまでのロジックと、それを支える情報インフラ、そして人をうならせるような合理性や納得感ではないだろうか。

たとえば減損の判定・認識という場面では、そこで使われる公正価値の算定に昔から蓄積されてきたファイナンス理論の知見に基づくロジックが駆使されており、物事の見方として学べることが多くある。また最近はマーケット情報がデジタルの形で急速に拡充しているので、今まで見えなかったものも比較的容易に見えるようになった。この見えることによる新たな発見がまた面白い。のれんの減損はそのこと自体決して歓迎されることではないが、買収時に少し背伸びをして買ったビジネスが、その後何年も自社で育てる中で様々な無形資産の価値が向上したものの、それらの価値ある資産を持ちながらも全体としてはそれに見合うキャッシュフローや市場価値を生み出せていない何らかのビジネス上の課題が浮き彫りになるのだとしたら、経営に対する重要な情報発信としてまさに会計の本領発揮と言えるのではないだろうか。毎年行われる減損判定の状況が前広に開示されるようになると、投資家にとっても有用な情報となる。

会計に求められる創造性

Creative accounting という言葉はネガティブな意味を持つが、常に進化し続けるツールである会計を使い経済実態を浮き彫りにし、経営課題を明らかにすることに創造性を発揮することは、惜しみなく努力を注ぐに足るやりがいのある仕事だと思う。しかも会計は時代を超える世界の共通言語だ。その広がりには無限の可能性がある。借方、貸方という発想を会計以外の分野に応用することを考えてみるのも面白そうだ。過去を踏まえ、将来に向けて世界を舞台に活躍する職業専門家にとっての大きな武器が会計ともいえる。

PwC が毎年ダボス会議に合わせて発表している Global CEO Survey の最新版によると、様々な作業の自動化が進む現代において、クリエイティブでイノベーティブ、そして高い感受性を持つ人材がリーダーとして活躍することを、世界の CEO は最も強く求めている。世界の CEO はデジタルへの投資を進めるだけでなく、人材への投資にも益々積極的になっている姿が調査からは浮き彫りになっている。

デジタル化が進み多くのことが自動化する中で、人への投資はクリエイティビティ、イノベーション、感受性など、機械だけでは十分な対応ができない分野に行われている。人間と機械の組み合わせによって双方の能力を超えた新しいことを実現するのが目標だ。決してどちらか一方が他方を飲み込んでしまうような関係性ではない。

会計にも同じアナロジーが当てはまるかもしれない。会計は決して金額で表現できるものがすべてではない。金額で表現できない情報と組み合わせることで、対象に関する全体像をより明確に浮かび上がらせるのが会計だ。会計基準に従って表現される数値は、世界に通用するので便利だ。しかし、数値だけでは表現しきれない部分について、注記や MD&A と組み合わせることで企業価値というものがよりはっきりと見えてくる。

個々の企業の中長期的な企業価値の本質を評価できるように、どのような注記、MD&A が必要なのか、さらには統合報告のように財務情報と非財務情報を組み合わせることでいかにより大きな目的を達成できるかを考えるのも会計プロフェッションの役割だ。会計の目的は過去

の記録にとどまることなく、将来に向けた企業価値の本質をつまびらかにすることにこそより大きな意義がある。

内部統制と会計監査

内部統制というのも考えてみれば面白い仕組みだ。会計には主観が反映され、出てくる結果は非常にわかりやすい半面、それが生成された過程も含めて理解しないと、その本当に意味するところは読みきれない。会計がカバーする領域が広いからこそ、多数の人が参加して結果が導き出されるのであり、ここで一貫性のある主観を維持するためにも内部統制が必要とされる。会計上の見積りに関して入る査閲は、担当者よりも上位でより広い視野を持つ者の知見に照らしても整合性のある見積りとなっているかどうかを検証するのが目的であり、再計算といった作業にとどまるものではない。内部統制に職業倫理が求められるのはもちろん、会計により正しく経済実態を反映させるための創造性も求められる。

筆者は30年にわたり会計監査に従事してきた。はじめは会計を通じて企業経営の全体像を垣間見ることができるこの職業に大きな喜びとやりがいを感じた。年数を経るに従いその難しさも痛感するようになった。会計にはどうしても経営者の性向が反映される。会計プロフェッションには求められる職業倫理があり、そのこと自体は職業としてのやりがいを高める要素なのだが、それが人格にもかかわるものであるがゆえに、監査人としてそれに接するために求められる人間力を高度に磨くという課題は依然として大きく残されている。

そして会計監査人には職業的懐疑心の発揮が求められる。現場において自ら発揮することはもちろんだが、監査チーム、監査法人単位で適切な職業的懐疑心の発揮を常に確保することは容易なことではない。トップがお題目を繰り返し唱えても実現しないし、無理に押しつけても適切に発揮されるとは限らない。チームや法人の風土として定着しなければならず、お互いに磨きあう姿勢が必要だ。プロとしての正義感を明確にし、全員が公益のためにこれを実践する必要がある。それが監査法人という職場のやりがいともいえる。

基準設定と会計教育

会計基準設定主体もまたやりがいに溢れる場であってほしい。独立性、客観性を保ちながら、世界から最高の知恵が結集されその力が存分に発揮されることは、地球上の経済活動を発展させるための礎として重要だ。日本から世界に向けて、多くの優れた知性が発揮されることを期待したい。

設定された基準やその根底にある思想は広く浸透させなければならない。経済界はもちろん、教育の場にも行き渡らせる必要がある。教育の場で会計の魅力に一人でも多くの学生・生徒が目覚められるように何ができるのか、一人の先輩会計人として真剣に考えていきたい。

ところで、最も身近な会計教育はお小遣い帳をつけることだろう。筆者にも2人の子供がいるが、幼少のころよりあまり細かいことは言わなかったものの、お小遣い帳だけはしっかりとつけさせた。性格が如実に出るもので、几帳面な兄とおおらかな妹の違いから親として多くの気づきをもらった。残念だったのは、2人とも会計を職業として選択しなかったことだ。しかし、彼らは人生の選択において、アカウンタビリティある判断をしたのだ。最も身近な会計経験が彼らの長い将来にきっと活かされることを祈ってやまない。